

SUZUKA UNIVERSITY

LIBRARY NEWS

2024 年度
12 月号

こんにちは！ 附属図書館です。

2024 年も残りわずかとなりましたが、皆さんどんな 1 年でしたか？

今年は、元旦から大きな震災があり悲しい年の始まりとなってしまいました。

復興も遅れているようなので、早く進む事を願うばかりです。

暗くなるのも早くなり、日に日に寒くなってきましたね。

来年に向けて、残りの毎日をどう過ごしましょう。

温かい飲み物でも飲みながら、ほっこりと読める、

そんな自分の心に残る 1 冊を探してみたいはかがでしょうか。



図書館からのお知らせ

11/12 日～14 日

鈴鹿高校より 13 名のインターンシップ生が来てくれました。グループに分かれて 図書館の業務を体験し、いろいろなクリスマスの飾りを制作してくれました。とても素敵で可愛い作品ばかりなので、館内に飾ってあります。ぜひ、ご覧になってください。



【 お知らせ 】

・ 12 月 27 日(金)～1 月 5 日(日) まで休館です。

今月の展示コーナー

今月の展示コーナーは、
鈴鹿大学こども教育学部・上田ゼミの学生たちによる

「保健室の片隅に置きたい本と物」

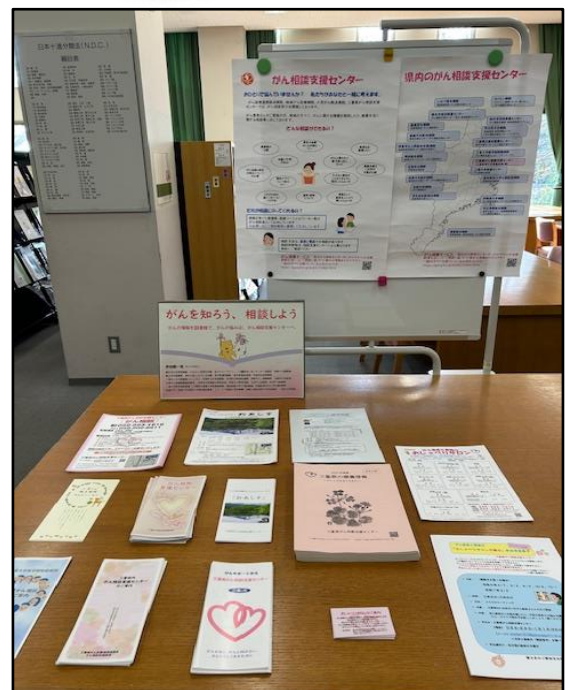
保健室には、様々な理由でこどもたちが来室します。
保健室には、救急箱や健康診断器具以外に、こどもたちのために、
養護教諭が置いておく季節の展示物や本、物があります。
健康に関する絵本や背中を押してくれる本、
疲れた時にほっとできる本、さびしい時ぎゅっと抱きしめられる
ぬいぐるみやクッションたち。ソファを設置しておりますので、
ゆっくりご覧ください。



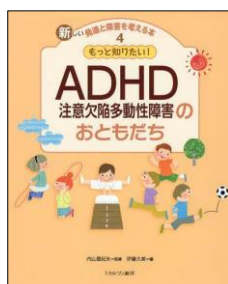
三重県立図書館と連携し、

「がんを知ろう、相談しよう」

キャンペーンを開催することといたしました。
パンフレットがありますので、ご自由にお持ちください。



発達と障害を考える本④ ふしぎだね!? ADHD(注意欠陥多動障害)のおともだち



内山登紀夫 / ミネルバ書房

こども教育学部 教授 上田ゆかり

大学の教員になる前は、三重県内の小中学校で養護教諭をしていました。保健室には、ケガの手当てや、頭痛や腹痛などを訴えて子どもたちがやってきます。それ以外にも「先生、なんかしんどい」と言って、はっきりした原因が分からないけれど、困り感を抱えてやってくる子どももいました。

しばらく、話をして教室に戻っていく子もいましたが、何度も来室を繰り返す子どももいました。その中には、発達障害のある、あるいは発達障害かもしれない子どももいました。その子と一緒に考え、その困り感を解決するための支援をしてきましたが、解決するためには、自分や周囲の子ども、教職員がその子の特性を理解することがとても重要でした。

この本には、「ADHDはこんな障害」だということがイラストを交えて分かりやすく書かれています。さらに、「ADHDの子どもはこんなことで困っている」「こうしたら、うまくいくかも」というヒントも書いてくれています。教員志望の人には、自分がADHDの子どもの特性を知るために参考にもなりますし、将来、教員になった時に周囲の子どもたちに理解を促すために話をする時にも役立ちます。

この本は、シリーズ化されていて「自閉症のおともだち」「LD（学習障害）のおともだち」なども出版されています。きっとこれまでに会った、これから会えるかもしれない「ちょっと気になる子ども」と関わる際のヒントをくれると思います。教員志望でない人にも役立つことがいっぱい書かれています。

もちろん、ADHDの子ども一人ひとりに個性があって、この本に書いてあることだけで全てを解決できる訳ではありません。そのことを頭の隅に置きながら、一度、手に取ってみてはいかがでしょうか？

ブルシット・ジョブの謎：クソどうでもいい仕事はなぜ増えるのか



酒井隆史 / 講談社現代新書 2645

短期大学部 助教 井上剛男

現代社会は仕事の生産性を高めるため、仕事の効率化や合理化を図ってきた。にもかかわらず、この社会は「クソどうでもいい仕事（ブルシット・ジョブ）」であふれている。政府や地方自治体などの公的部門だけでなく、企業などの民間部門でも広まっているという。では、どのような「クソどうでもいい仕事」が出現し、そんな仕事はどうして増えているのか。本書は、この問題を論じたD. クレイバーの『ブルシット・ジョブ：クソどうでもいい仕事の理論』の訳者の一人である酒井隆史が著した『ブルシット・ジョブ』の入門書である。

「クソどうでもいい仕事」は5つのタイプに分けられる。各タイプの詳細な説明は本書に譲るが、「タスクマスター」（不要な仕事を作りだし、部下に命令する仕事をしたい上司）と「それ以外の4つ」（上司のご機嫌を取ったり、上司の命令の辻褃合わせをさせられる部下）に大別すると理解しやすい。傍から見ると、この上司と部下は無意味で unnecessary な仕事に精を出しているように見えるのだが、組織での彼らの評価は比較的高いという。彼らは、自分の仕事にむなしさや苦痛を感じながら、むなしさを感じずに仕事をしている人を攻撃することで、「クソどうでもいい仕事」で高い評価を得ている自分たちや「クソどうでもいい仕事」自体を正当化しているからである。「クソどうでもいい仕事」は、組織にとって無駄なだけでなく有害でもあるのだ。

他にも、「クソどうでもいい仕事」がまん延したのは新自由主義が官僚制と結びついた結果であることや、エッセンシャル・ワークは「クソどうでもいい仕事」ではないが故にその待遇が低く抑えられることなど、いろいろ考えるネタを提供してくれる面白い本だと思う。

ちなみに、この紹介文が誰にも読まれなかったら、今回の紹介文を書く仕事は「クソどうでもいい仕事」になるだろう。